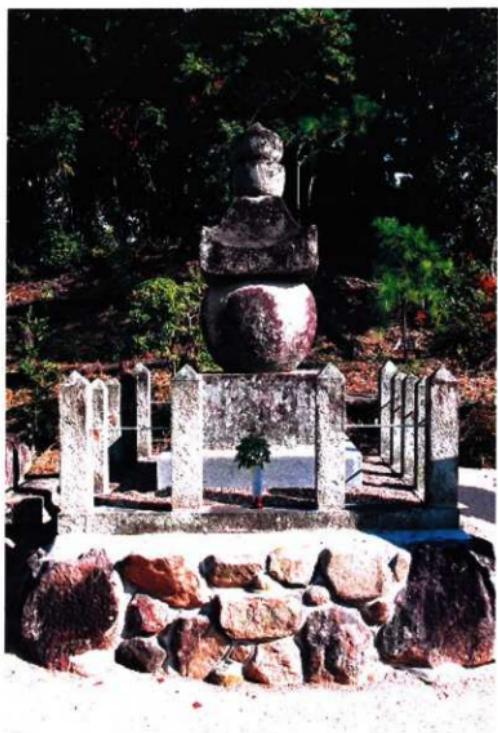


兵庫県三木市吉川町

法光寺五輪塔保存修理工事に伴う
発掘調査報告書

2008. 3

三木市教育委員会
(宗) 法光寺



兵庫県指定重要文化財 法光寺 石造五輪塔（改修後）



兵庫県指定重要文化財 法光寺 五輪泥塔

序 文

法光寺は飛鳥時代の白雉2年（651）法道仙人の開創と伝えられる古刹であります。今も貴重な文化財がたくさん残されています。

この報告書は、兵庫県指定文化財である五輪塔の保存修理工事に伴う発掘調査の報告書です。

五輪塔は、当初、南側の行者堂の横に置いてあったのを、昭和のいづれかの時期に今の位置に組みなおして設置しました。それから年を重ねる度、幾多の風雨にさらされながらも堂々とした姿をしていましたが、近年、土台の石積みが脱落し、土が流出するところとなりました。このままであると永久的な保存が困難であることから、平成19年度に兵庫県と三木市の指導と補助を受け、石の積み直しや、土の入れ替えなどの改修を行なうことになりました。

工事開始は、平成19年夏より、五輪塔の解体、組立、石積みや土入れなどを岸本石材、写真測量や遺物の図化を有限会社アムキー、土の調査掘削を株式会社マツダに依頼をしました。

今回の改修の大きな成果は、もちろん五輪塔土台の改修ですが、五輪塔を移動したところ、その下から夥しい数の五輪泥塔片が出土しました。古来からこの五輪泥塔は五輪塔（現位置）背後の東側の丘陵から多量に出土しており、その一部は兵庫県重要文化財の指定を受け、残りは以前の五輪塔の組み直し前（時期は昭和）に、その下に埋納したとの寺伝があり、それが証明されました。

当報告書にはこの調査、改修工事の記録と調査に基づく所見を資料としてまとめております。本報告書が当寺の五輪塔、五輪泥塔を広く紹介するとともに、文化財を愛する心を育む一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、本事業にご指導、ご協力を賜った関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

吉川町法光寺住職 玉田弘榮

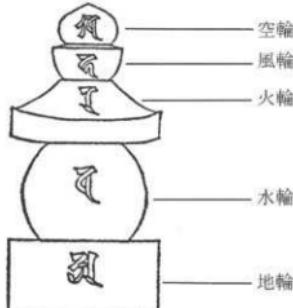
例　言

1. 本書は、兵庫県三木市吉川町法光寺287に所在する兵庫県指定重要文化財法光寺五輪塔の保存修理工事に伴って実施した発掘調査の報告である。
2. 発掘調査と報告書の作成作業は、県費及び市費の補助事業とし、平成19年8月27日～平成20年3月31日までの間、三市教育委員会が主体となって実施した。
3. 発掘調査及び報告書の作成は、三市教育委員会 文化スポーツ振興課
主査　畠中剛 が行った。
4. 発掘調査及び報告書の体制は以下のとおりである。

事務局	法光寺 住職 玉田弘榮
調査員	三市教育委員会 松村 正和
作業	〃 畠中 剛
	五輪塔解体、移動、据付など
	三木市口吉川町西中347-2 有限会社 岸本石材店
	写真撮影、五輪塔、五輪泥塔図化
	三田市弥生が丘3-18-3 有限会社 アムキー
	調査掘削
	三田市池尻25 株式会社 マツダ建設

5. 遺構の写真は畠中が撮影した。また五輪塔全景、五輪泥塔の写真については有限会社アムキーが撮影した。
6. 現地調査から報告書作成まで以下の方々にご協力、ご教示をいただいた。
記して感謝の意を表したい。(敬称略)

- ・三市教育委員会 小網 豊 赤松恵子 宮脇美佳江
- ・三木市文化財保護審議会 西阪義雄
- ・兵庫県教育委員会 甲斐昭光 柏原正民
- ・北播磨地区文化財行政担当諸氏 森下大輔 宮原文隆



法光寺五輪塔保存修理工事に伴う発掘調査報告書

序 文

例 言

第1章 はじめに.....	1
第2章 法光寺について.....	2
第3章 工事、調査に至る経過.....	3
第4章 工事の内容	
第1節 解体工事.....	4
第2節 組立工事.....	4
第5章 調査の方法.....	5
第6章 調査の内容	
第1節 出土遺構.....	5
第2節 五輪塔について.....	7
第3節 出土遺物について.....	9
第7章 まとめ	
第1節 遺構について.....	11
第2節 五輪塔について.....	11
第3節 五輪泥塔について.....	11

挿 図 目 次

図-1 法光寺の位置.....	1
図-2 法光寺境内.....	3
図-3 五輪塔実測図.....	8
図-4 五輪泥塔実測図.....	10

写 真 目 次

写真1 五輪塔全景	卷頭
写真2 五輪泥塔.....	卷頭
写真3 法光寺.....	13
写真4 五輪塔位置全景（北より）.....	13
写真5 五輪塔土台遺構全景（西より）.....	14
写真6 五輪塔土台土層断面（南より）.....	14
写真7 ピット内五輪泥塔出土状況（北より）.....	15
写真8 ピット土層断面（南より）.....	15
写真9 今回出土の五輪泥塔.....	16
写真10 地輪片	16
写真11 地、水輪片	17
写真12 水、火輪片	17
写真13 火、風、空輪片.....	18
写真14 風、空輪片.....	18
写真15 スナップ.....	19

第1章 はじめに

三木市のある兵庫県は、瀬戸内海から日本海に渡って広がる県域である。法光寺の所在する三木市は、兵庫県南東部に位置する内陸の都市である。平成17年10月に北東に隣接する美嚢郡吉川町と合併した。東及び南は神戸市、南西は加古郡稲美町、西は加古川市、北西は小野市、北は加東市、北東は三田市と境を接している。近世以前の旧分国では、播磨の国の美嚢郡に属する。

法光寺は、三木市吉川町法光寺にあり、旧吉川町の南西部の標高約160mを測る山上に位置する。

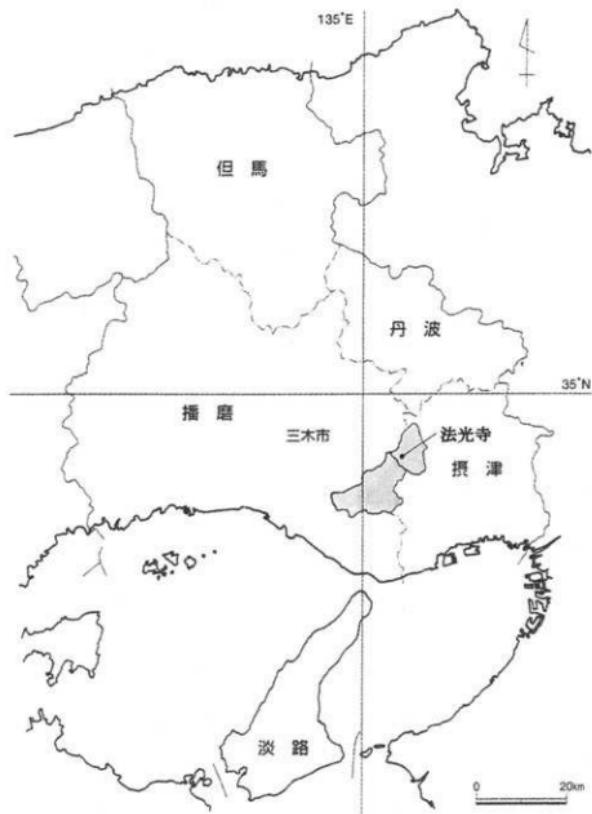


図-1 法光寺の位置

第2章 法光寺について

吉川町法光寺は高野山真言宗、本尊は阿弥陀如来、古くより印度の道仙、法道仙人の開創と伝え、当時の豪族 細田三郎が協力して伽藍を建立し、平安朝の末頃から吉川庄内の崇敬を集めている。

建仁3年(1203)から慶応3年(1867)までの古文書が数十通と、境内には石造五輪塔や、その塔の下(今回調査による)、また周辺より出土した五輪泥塔で、阿弥陀八萬四千内と記され、南北朝頃の強い民間信仰の痕跡を残す遺物も存在している。

また寺宝として、修正会に使用されたと思われる鬼面8面とこれを納める櫃が2つあり享徳4年(1455)、康正元年の墨書銘があり、その頃の盛大な寺勢の一端が伺われる。

鐘楼にある梵鐘(市指定重要文化財)は慶長6年(1601)と平末次の刻銘があり姫路の野里の鉄物師との関係が伺われる。

また宝蔵には、明版の一切経二百十三帙が完存している。

吉川谷は、もと皇室の御領地で建武年間には、吉野朝側の有力な財源であり、その後、永い南北抗争のうちに遂に北朝側の萬里小路家を領家として、戦国末期まで密接な関係を保ち、本寺は在地の中心政府であったと思われる。

江戸時代になると、代々の將軍から寺領五十石の朱印状が出されており、明治維新の際には、有栖川宮家の祈願所となった。

以上の寺歴も永年の間には盛衰を繰り返し、寺務二十余院、学呂 四十余坊、合せて七十四余といわれた寺坊の跡も現在の庫裏、宝喜院だけとなっている。本堂は天正7年(1579)三木の戦乱により焼失したとされ、後、元禄年中に再建、享保20年にはまた灰燼となり元文5年(1740)4月に完成したものである。

また、工匠の手間二千六百工の記録がある。(棟梁日原家古記)加えて本堂内陣には法道仙人が自ら彫ったと伝えられる本尊・阿弥陀如来座像が安置されている。また客殿のふすまには京狩野家9代目狩野永岳が、江戸時代の天保6年(1835)に描いた障壁画が残っている。

本来、西面の伽藍を東西とし、山門も現在の場所に移建した。塔が辻、阿弥陀院等の遺構から考えて近隣の東光寺や蓮花寺に似通った伽藍配置であつたと思われる。

(注) 上記文章は、法光寺住職 玉田弘榮氏が書かれたものを、畠中が加筆した。



法光寺 古文書(県指定)



法光寺鬼面(写真大 県指定)



図-2 法光寺 境内（三木市都市計画図を修正）

第3章 工事、調査に至る経過

昭和47年3月24日の兵庫県重要文化財指定以来、約36年の風雪に耐えながら堂々とそのたたずまいを見せてきていたが、近年、正面に向かって左側の土台に組まれていた石が抜け落ち、土が流出して崩落しそうな状態（写真中、丸印部分）になっていた。五輪塔本体については傾くことはなかったが、今後、地震や大雨などの災害に備え、修理を実施する必要に迫られると共に、合わせて兵庫県の重要文化財の巡視員にも、早急な修理を要するとの指摘を受け、県教委、市教委、所有者により打合せを行い、平成19年度の県補助金、市補助金を受けて五輪塔を解体し、崩落しかけている石を積み直す土台の整備とそれに伴う発掘調査を実施することに決定した。



五輪塔改修前

第4章 工事の内容

第1節 解体工事

解体に先立ち、五輪塔各部材の表面観察と写真を前後、左右の四方向を基本とし、加えて斜め四方向から撮影した後、五輪塔周囲の玉垣と玉垣を連結している金属パイプを取り払った。

次に各部材の向きや角度などに誤りなきよう、布テープで目印等を記載し、石材の損傷に充分な注意を払い、クレーンにより順序良く、丁寧に解体、移動を行った。最後に五輪塔周囲（側面）の石材を移動して、解体を終了した。解体中は、必要に応じて写真撮影を行った。



五輪塔解体風景

第2節 組立工事

発掘調査で基礎地盤にトレーナーを設定し掘削したことから、地盤の均一化を図るために土を埋め戻し、充分にランマーで突き固めながら、所定の高さまで立ち上げた。

次に地盤に、長さ 2.13 m 前後、幅 16.5 cm、高さ 7.5 cm の延石（玉垣土台石）を四方に方形で組み置き、内部に型枠を組んで背筋し、基礎コンクリートを打ち込んで、その上部に 1.2 m × 1.15 m × 29 cm の石製の台を置いた。また台石と延石との空間には玉砂利を約 30 cm の幅で敷き、台石の上に五輪塔を組み上げた。

最後に、土台西側（正面）の側面の基礎石を組み、組み上げた石と石、または土の隙間にコンクリートを充填の後、玉垣を立てて工事は完成了。

なお、完成写真は、玉垣を立てる以前と以後の 2 回に分けて正面を基本に四方向、斜め、また業者により上面からも撮影した。

土台に西側（正面）の側面の基礎石と玉垣を連結していた金属パイプは新調したが、それ以外の部材については、すべて再利用した。



ランマーによる埋め戻し

第5章 調査の方法

当初、玉田弘榮住職の記憶では、先代住職より聞いている事として、昭和期（時期は不明）に、現在の五輪塔の丘陵南東側よりいつの頃からか、五輪泥塔（県指定重要文化財）が出土していた。また、五輪塔も東の行者堂の脇に立っていた。そこで推測であるが五輪塔の整備をするため、現在の位置に土台や基礎を作り上げて据える事にした。その際、合わせて出土していた五輪泥塔の比較的、形の良好なものは、寺で保管し、後の破片は五輪塔下に埋めたということではないかと考えられる。

この事象を想定しながら、ひとまず、五輪塔の各部材をクレーンにより移動し、すべての部材を除去後、掘削により精査を行うこととした。

なお、五輪塔の全景写真と実測は、業者に委託したが、それ以外の写真、実測は調査員が行った。

第6章 調査の内容

第1節 出土遺構

五輪塔の各部材をクレーンにより順次吊り上げ移動した後、土台基礎部分を精査した。

その結果、地山直上より、幅 20 cm 前後、長さ 20 cm ~ 1 m 前後の板石を検出した。板石は方形に組み合わされており、中

央部には 30 cm × 65 cm の同じく方形の範囲があり、その中の土を除去したところ、兵庫県指定重要文化財で法光寺に所蔵されていると同様の五輪泥塔の破片が露出しているのが認められた。

さらに、板石を除去し、地表面を精査したところ、径 50 cm、深さ 20 cm のやや楕円形のピットが検出され、ピットの中には五輪泥塔が多量に含まれていた。

出土状況は、破片を無作為にピットの中に雜然と埋納したような状態であった。

五輪塔設置の地盤は、東側の丘陵の斜面より延びる黄褐色を基本とした土層を現在の五輪塔設



発掘調査風景 1



板石（西より）

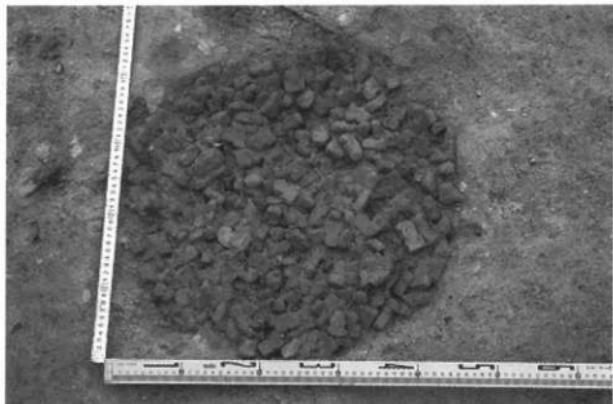


ピット検出（西より）

位置の高さまで掘削して平坦面にし、さらに、掘削した土を使用して正面部分の三方向（北、西、南）の成形を行い、平坦な土台作りをし、ほぼ中央部にピットを掘りくぼめ、五輪泥塔片を入れ、それを取り囲むように四方に板石を組んで、中央の長方形部分に土を充填し、その上に五輪塔を組み上げたと考えられる。



ピット精査風景



検出したピット（北より）



同 断面（南より）

第2節 五輪塔について

五輪塔は、神戸層群凝灰質砂岩製で、総高202.5cmで、おそらく、七尺塔として建てられたものであろう。

地輪部は高さ41.5cm、幅80cm、上面に径18cmの水輪の柄を受ける穴が中央に穿孔されている。また、下部の細かな欠損が酷く台石との設置面に隙間を作る所以、隙間にコンクリートを充填し補修をおこなった。

水輪部は高さ59cm、下端径40cm、これより39cm以上が最大径で80cm、上端径40cmで肩の張った壺形をなしている。上部も平坦で容器化は見られなかったが、底部には地輪に差し込む柄が存在する。

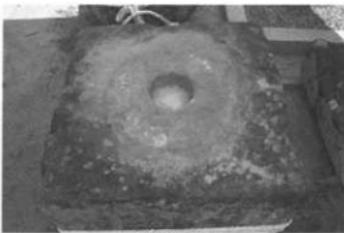
火輪部は高さ50cm、軒は幅73cm、中央の厚さ16cm、隅の厚さ24cm、軒口を垂直に切り、軒端から16cm入ったところより反りはじめ、隅上端8cm、下端で4cm反転している。火輪部上端一辺は32cmである。

また、風輪部にある？を受ける径20cmの穴が穿孔されている。北東隅の突起の部分が一箇所欠損している。

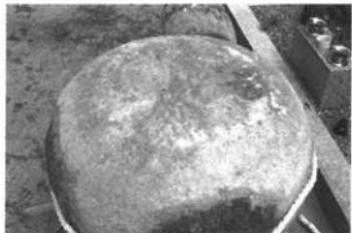
風輪部と空輪部は一石で造られており、高さ52cmで、風輪部の径35.5cm、高さ21cm、空輪部の径35.5cmである。風輪部の底部に火輪部に差し込む長さ5cm程の柄が存在している。いずれの部材にも、文字、納入遺物は認められなかった。塔の形式から14世紀前半のものと推定できる。



五輪塔全景（西より）



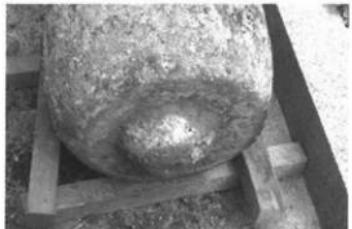
地輪枘穴



水輪上面



火輪枘穴



風輪（枘）

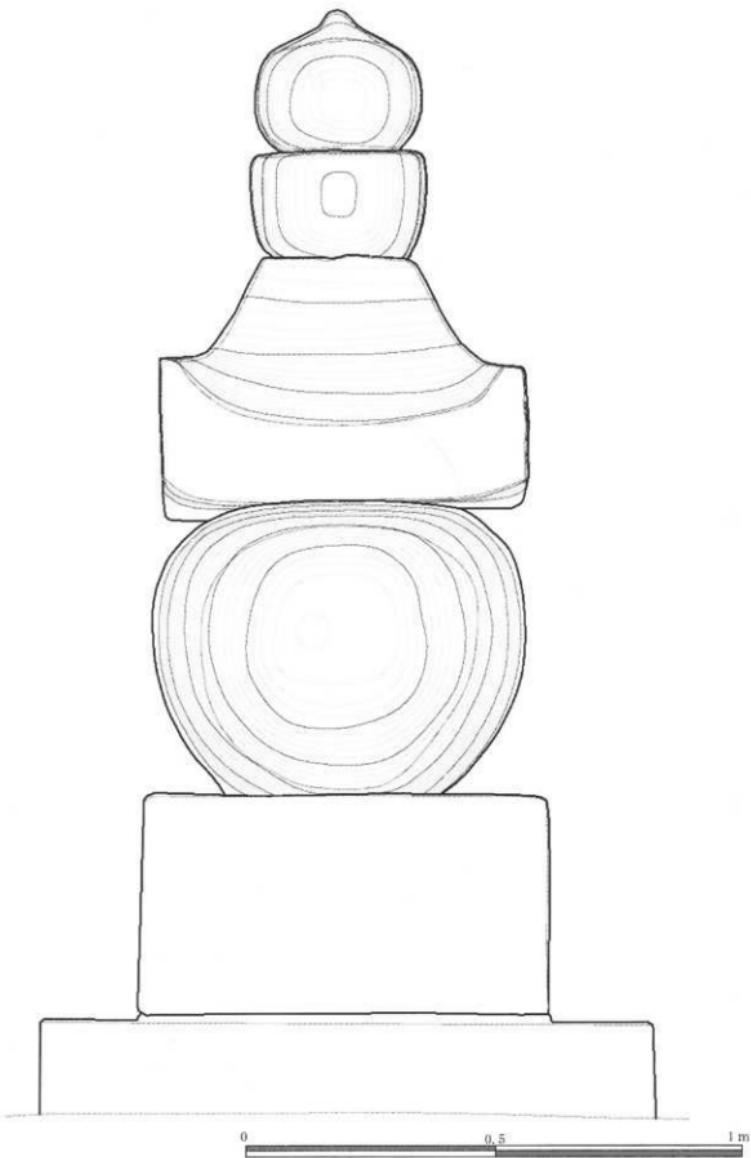


図-3 五輪塔実測図

第3節 出土遺物について

今回の出土遺物は、すでに重要文化財に指定されている五輪塔形を呈する五輪泥塔と同一のもので、径 50 cm、深さ 20 cm のピットに雑然と埋納されたような状況で検出された。

全長 6.5 cm 前後、幅 2.5 cm 前後を呈し、表面には、**ケン**(ケン)、**カン**(カン)、**ラン**(ラン)、**バン**(バン)、**アン**(アン) の梵字が認められる。また、裏面には、「阿弥陀八万四千内」の八文字が捺印されており、低火度での焼成で、色調は、暗褐色もしくは淡赤褐色を呈している。ただ、今回出土の五輪泥塔は、五輪塔形を型で打ち抜いて作成されているが、出土した五輪泥塔の各個体を観察すると、最低 2 つの型が想定できる。一つの型を基準とするなら、それより体部全体がやや細身の型が存在するようである。

残存の部位と数量については、一部、接合により完形品が数点あるものの、ほとんどが破片で、地輪部単独（303 点）、地輪部と水輪部（256 点）、地輪部と水輪部と火輪部（2 点）、水輪部と火輪部（157 点）、火輪と風輪と空輪（148 点）、風輪と空輪（210 点）に分かれて破損していた。また、その他摩滅が激しいため部位が不明な小片（260 点）も存在した。なお、型の違いによる固体数の違いは認められなかった。また、地輪部分の底部に穿孔は認められなかった。

少し気づいた点は、過去の法光寺関連の書物において、裏面には「阿弥陀八万四千」との報告がされているが、今回出土の五輪泥塔は、摩滅が激しく字の読み取りが困難であった。詳細に観察したところ、「四千内」は読み取れるが「阿弥陀八万」の五文字を読み取れる個体は、県指定の分を含めて一点も無かった。また、「四千内」が比較的上部に認められ、「阿弥陀八万」の五文字が入るスペースが無いのではないかという個体も若干、存在した。しかし、過去の良好な状態で観察された先学の方々が、確認されている事なので間違いは無いと思うが、少々疑問に感じたため蛇足とは思いつつ記述をした。

泥塔表面



泥塔裏面

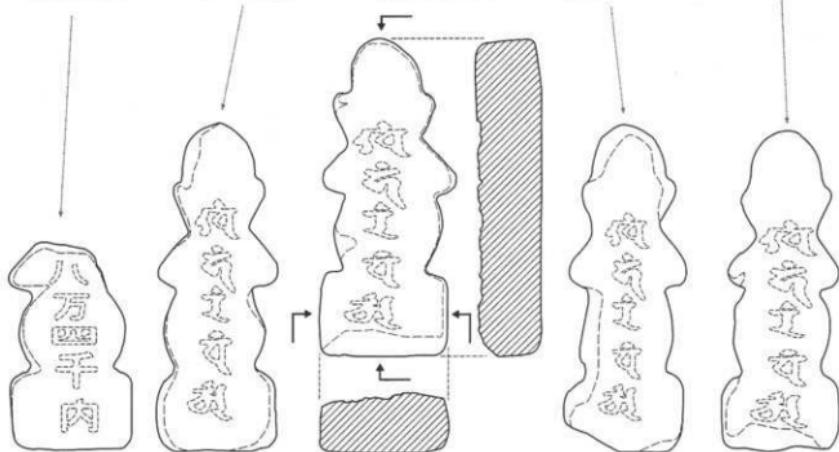


図-4 五輪泥塔実測図 (いずれも兵庫県指定分)



第7章　まとめ

第1節　遺構について

遺構は径50cm、深さ20cmの円形のピット1箇所でだけであった。しかし、いずれも先述したように、五輪塔や五輪泥塔の建立や作成時期とは、大きく異なり、五輪塔を昭和期に現在の位置に移転する際、掘削されたものであり、そこに五輪泥塔が埋納されたものである。

第2節　五輪塔について

昭和7年（1932）に発行された中村直勝「湯川山法光寺」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第9号によると、現在の位置ではなく、切り開かれた丘陵東側の行者堂の近くに立っていた写真が掲載されている。また同文献によると、五輪塔の背後の東側丘陵中に、半円形で盛り土され、中央部が少しへこんだ場所に12基の仏像が祭られていたとの記述があるが、今は仏像は存在しない。しかし、その盛り土がなされた高まりは存在しており、もともとは五輪塔が当初、そこに建立されていた可能性が考えられる。

五輪塔の時期は、型式より14世紀前半と推定できるが、法光寺の寺歴において誰の或いは、何の供養かを明確にする正確な記録は残存しない。吉川町地域に限っては現在確認している石造五輪塔は、法光寺の分を含めて8基存在する。いずれも14世紀前半頃～16世紀頃のものであり、法光寺の五輪塔は町内でも比較的時期の古いものである。

第3節　五輪泥塔について

前出の「湯川山法光寺」の文献によると、五輪塔背後の東側丘陵中の削平したところに、12基の仏像が存在した上方向に土を削った断面があり、その3～9cmの幅の土層より頻繁に見つかっていたらしい。古老の一説ではさらに、昔は壺に入れて埋納されていたという。当時の調査でもその層を精査したが、破片は採集されたものの、完形品は見つからなかったという。

また、すでに当時、先代の住職が水甕一杯の五輪泥塔を採集し、保存されおられたことも記述されているが、現在、その水甕は寺には存在せず、想像をたくましくすると、五輪塔を現在の位置に移設する際、水甕一杯分の五輪泥塔は、比較的形のあるものだけを寺に保管し（兵庫県指定文化財の分）、残りはすべて埋納された、つまり、今回の調査で出土した五輪泥塔ではなかつたかと考えられる。

五輪泥塔の出土状況は、土盛りの中、また建物の基壇、あるいは寺院等での伝世品に大別されるが、その例も少なく、未だ確定されているものではない。法光寺の場合も丘陵上の土層から発見されているが、その土層の時期や性格は不明であり、五輪泥塔を使用した当時の土層、あるいは位置と断定することは控えておきたい。

今回確認された五輪泥塔は、五輪塔形の扁平型式の泥塔のみで他種は一切混入しておらず、ほぼ大きさも先述したやや細身の型の違いだけで、ほとん

ど大きさは変わらない。個体数は泥塔の性格上、あるいは裏面に「八万四千内」という捺印がしてあることと合わせて、多量に存在したものと考えられる。今回、検出した数量は、単純に地輪の破片を数えると 561 個体検出しており、不明な小片も合わせて考えると、それ以上の数量、おおむね 700 ~ 800 個体くらいではないかと考えられる。

五輪泥塔の時期であるが、一般に文献などから平安初期から鎌倉時代とされており、限定するのは原資料だけでは困難である。しかし、あえて推定するなら、五輪泥塔が扁平型式（比較的新しい形式）であること、他例に室町時代に入るものがあること、また、直接の関係があるかどうかの確証は無いが、今回改修した 14 世紀の五輪塔の存在などから室町期（初期～前半）と推定することも可能ではないかと考える。

五輪泥塔は、清浄な泥土を塔型の中に入れて形抜きの小塔とし、自他の無病息災、五穀豊穣などを願い、仏前に供養、納置するもので、中世の文献などから「泥塔供養」と呼ばれ、特に中央の貴族や皇室の間で執り行われたものである。また、泥塔を多量に作れば作るほど、その功德は広大無辺のものとされていた。法光寺においても同様の目的、形態で「泥塔供養」が行われたものと思われる。法光寺の皇室との深い関係から、中央の信仰形態を模倣した地方の民衆の民間信仰の貴重な事例であるといえる。

【参考文献】

- ・中村直勝「湯川山法光寺」
『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第 9 号 1932
- ・石村喜英「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座』8 1971
- ・萩原三雄・畠 大輔「泥塔研究小論－増穂町権現堂遺跡を中心に－」
『甲斐の成立と地方的展開』角川書店 1989



法光寺



五輪塔位置全景（北より）



五輪塔土台遺構全景（西より）



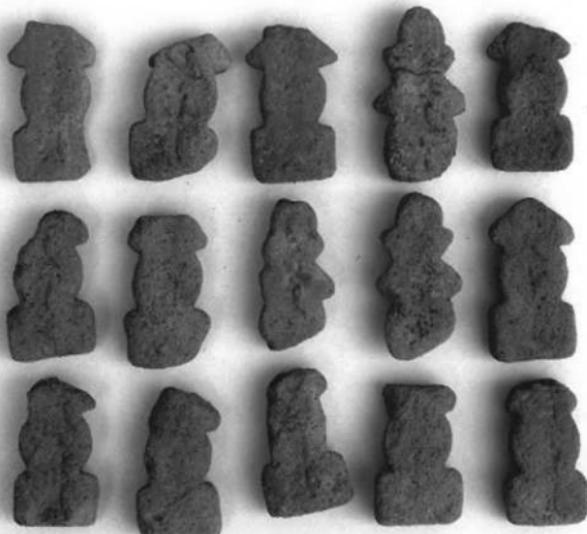
五輪塔土台土層断面（南より）



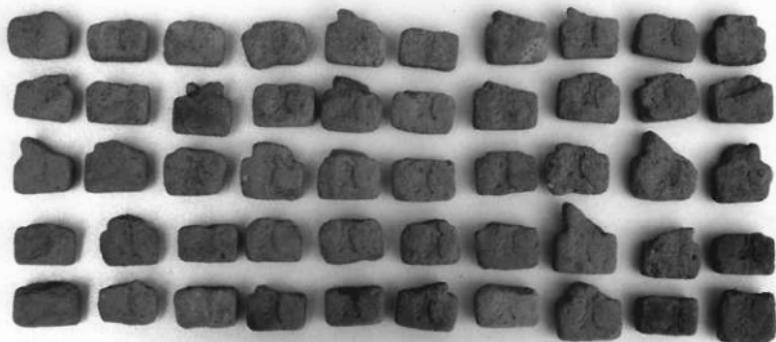
ピット内五輪泥塔出土状況（北より）



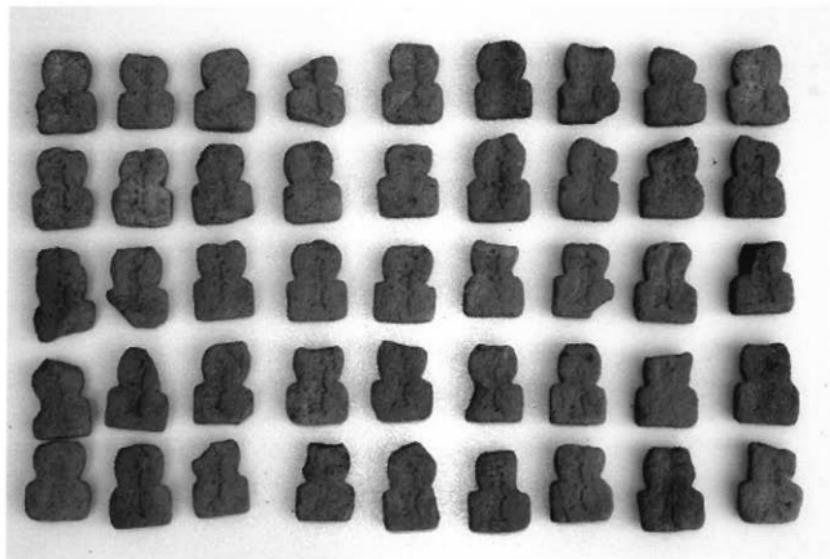
ピット土層断面（南より）



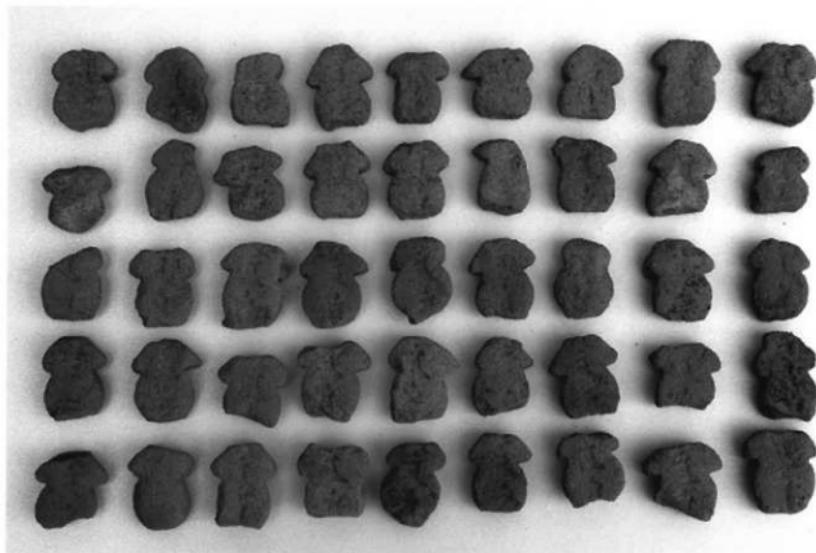
今回出土の五輪泥塔



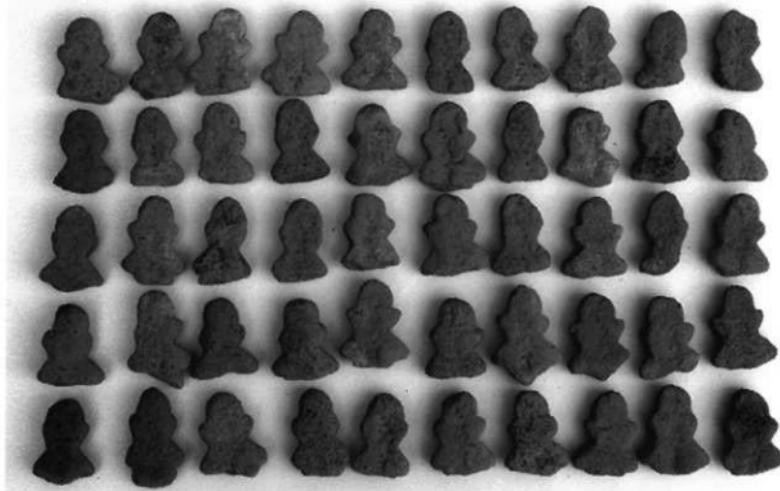
地輪片



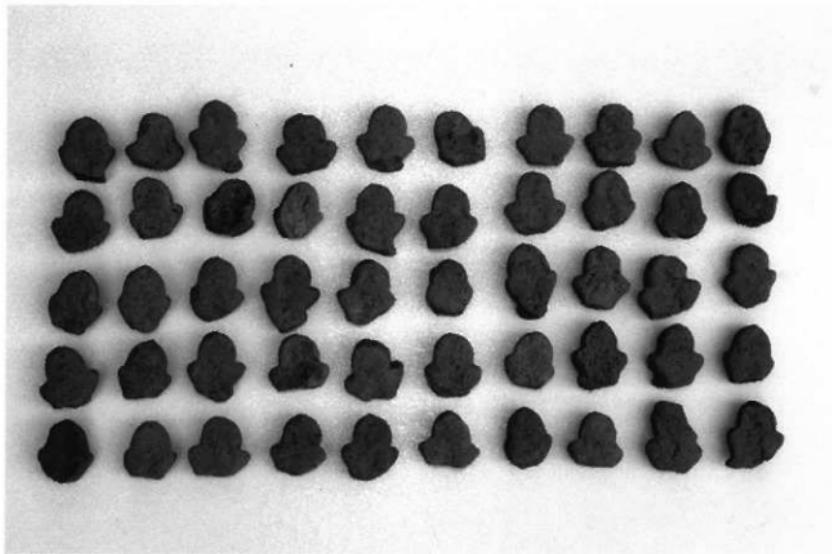
地、水輪片



水、火輪片



火、風、空輪片



風、空輪片



今回出土の五輪泥塔



地輪補修状況



写真撮影風景



解体作業

報告書抄録

ふりがな	ほうこうじごりんとうほぞんしゅうりこうじにともなうはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	法光寺五輪塔保存修理工事に伴う発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三木市文化研究資料							
シリーズ番号	第21冊							
編著者名	松村正和・畠中剛・玉田弘榮							
編集機関	兵庫県三木市教育委員会・宗教法人 法光寺							
所在地	〒650-8567 三木市上の丸町10-30 Tel.0794-82-2000							
発行年月日	平成20年(西暦2008) 3月31日							
(ふりがな) 所取遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
ほうこうじごりんとう 法光寺五輪塔	ひょうごけん 兵庫県 みきし 三木市 よかわちょう 吉川町 ほうこうじ 法光寺 287	市町村	遺跡番号	34° 52' 14"	135° 5' 53"	2007.8.27 ～ 2007.9.28	6 m ²	県・市 補助事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
法光寺五輪塔	五輪塔	室町時代 昭和時代	五輪塔・ピット1基	五輪泥塔	五輪塔、五輪泥塔 共に兵庫県指定重要文化財			

三木市文化研究資料 第 21 集

2008 年 3 月 31 日

法光寺五輪塔保存修理工事に伴う
発掘調査報告書

編集・発行 三木市教育委員会
宗教法人 法光寺

〒 650-8567 兵庫県三木市上の丸町 10-30

☎ 0794-82-2000

印 刷 有限会社 アムキー

〒 669-1317 兵庫県三田市宮脇 54-1

☎ 079-553-5670
